

インドの魅力

——投融資先としてのインド——



財団法人インド経済研究所
理事長
青山学院大学
教授

榊原 英資

1. 圧倒的な多様性の国

インドは多くの日本人にとってかなり理解しにくい国である。というのは、インドと日本は、ある意味では、対照的なポジションにある国だということができるからである。ひと言でいえば、インドは多様性の^{つぼ}坩堝、日本は逆にきわめて同質性の高い国である。

インドはアジアの中で最も長い海岸線を持ち、東はベンガル湾、アンダマン海を経て南シナ海に通じ、西はアラビア海、インド洋を経てアラブ、アフリカに面している。インドはその地理的条件から世界の交易の中心としての役割を担ってきたし、また、それゆえ、しばしば異民族の攻撃の対象になった。

ドラヴィダ語族が北西インドに進出したのが紀元前(BC) 3500年ごろ、アーリア民族がやはり北西部に進出したのがBC1500年ごろ。BC300年前後にはマウリア王朝が成立、ほぼ全インドを統合した王朝として栄えた。特にBC268～262年のアショーカ王のときがマウリア王朝の全盛期だったといわれている。

BC180年にマウリア王朝が減んだ後は、北部と南部だけではなく、東・西・中部等のさまざまな地域で独自の歴史的・文化的展開が活発になっていく。特に紀元(AD) 600年からAD1526年のムガル帝国の

創始からの時期、それぞれの地域にさまざまな特徴のある文化が花開き、現在のインドの多様性の基盤を形づくっていったのだ。地域とはいっても、それぞれの地域がヨーロッパの大国の一国に匹敵するのだし、また、その歴史もヨーロッパより長く古い。宗教の面でも、インドはきわめて多様で複雑多岐である。ヒンドゥー教徒が全人口の80%以上を占めてマジョリティを形成しているが、イスラム教徒も1億人近く存在し、世界第3のムスリム人口を有する国でもある。

インドは周知のように仏教誕生の地でもある。ブッダが生まれた時代(一説によればブッダの誕生はBC463年4月8日の満月の夜のことだったといわれている)は現在のヒンドゥー教の前身であるバラモン教が支配していたが、ブッダ=ゴータマ・シッダールタの仏教の創始はこのバラモン教支配への反逆でもあったといえるのだろう。同じ時期、北インドにて生まれたマハーヴィーラもジャイナ教を創始している。仏教もジャイナ教もカースト制度の最上位にあるバラモン以外の階層の人たちに急速に広がっていったのである。しかし、仏教を全インドに広めかつ国際的宗教にしたのは、インド亜大陸を統一したマウリア王朝のアショーカ王であった。アショーカは経典を編纂し、仏教を厚く保護し、仏教を一マガダ地方の宗教から全国的宗教にしたのである。また、クシャナ朝のカニシカ

王（AD 1～2世紀）はAD60年ごろ成立した「般若経」「法華経」「華嚴経」「無量寿経」などの仏典を編纂し、いわゆる大乘仏教を、中央アジアからひいては日本まで伝播する道を開いた。

現在、インドの仏教徒は全人口の0.7%を占めるにすぎないが、大乘仏教はスリランカ、ネパール、ミャンマー、タイさらにはベトナム、チベット、中国、日本に伝播し、世界の仏教徒は3億人を超え、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教に次ぐ世界第4の宗教になっている。インドにはヒンドゥー教、イスラム教、仏教のほかにもキリスト教、ユダヤ教、シーク教、ジャイナ教、ゾロアスター教など多数の宗教が存在し、まさに宗教の^{るつぽ}坩堝といった感がある。ちなみに現在の首相マンモハン・シンは少数派のシーク教徒（シーク教徒は全人口の1.9%）で、多くのシーク教徒と同様、常時ターバンを着用している。また、インド最大の財閥タタの総帥ラタン・タタはパーシーと呼ばれるイラン系移民。ゾロアスター教徒でもある。

こうした状況を反映して言語も多様である。インドというと英語圏だと思われることが多いが、英語を使う人口は知識人を中心に全体の2割から3割。ヒンディー語は連邦公用語でもあり3割以上が理解するといわれる。しかし、タミル語、テルグ語等17の地方公用語があり、このほか数々の地方言語が存在する。インドの州の区分は基本的には言語によっている。タミル・ナド州はタミル語、アーンドラプラデーシュ州はテルグ語といった具合である。インドはちょうどヨー

ロッパ全域と同じ程度の領土をもっているが、宗教的にも言語的にもヨーロッパ以上に多様性をもつ国なのである。ましてや、同質性の高い日本と比べれば、その多様性は圧倒的であるといえることができるのだろう。

2. 急成長するインド経済

さて、現在のインド。人口は11億人強だが世界の主要国の中で最も人口の増加率が高く、2025年には中国（現在13億人強）を抜いて世界一の人口大国になることが予測されている。2025年の時点ではインドの人口は16億6000万人、中国の人口は14億1000万人と推定されている。こうした人口動態を考慮すると、インドの成長率が2020年前後から中国のそれを上回

表1 ゴールドマン・サックスによる BRICs 諸国の今後50年の経済成長予想

(単位：%)

	ブラジル	中国	インド	ロシア
2000～05	2.7	8.0	5.3	5.9
2005～10	4.2	7.2	6.1	4.8
2010～15	4.1	5.9	5.9	3.8
2015～20	3.8	5.0	5.7	3.4
2020～25	3.7	4.6	5.7	3.4
2025～30	3.8	4.1	5.9	3.5
2030～35	3.9	3.9	6.1	3.1
2035～40	3.8	3.9	6.0	2.6
2040～45	3.6	3.5	5.6	2.2
2045～50	3.4	2.9	5.2	1.9

出所：Dreaming with BRICs: The Path to 2050/Goldman Sachs

表2 ゴールドマン・サックスによる今後50年の各国のGDP予想

(単位：十億ドル)

	BRICs				G6					
	ブラジル	中国	インド	ロシア	フランス	ドイツ	イタリア	日本	イギリス	アメリカ
2000	762	1,078	469	391	1,311	1,875	1,078	4,176	1,437	9,825
2005	468	1,724	604	534	1,489	2,011	1,236	4,427	1,688	11,697
2010	668	2,998	929	847	1,622	2,212	1,337	4,601	1,876	13,271
2015	952	4,754	1,411	1,232	1,767	2,386	1,447	4,858	2,089	14,786
2020	1,333	7,070	2,104	1,741	1,930	2,524	1,553	5,221	2,285	16,415
2025	1,695	10,213	3,174	2,264	2,095	2,604	1,625	5,567	2,456	18,340
2030	2,189	14,312	4,935	2,980	2,267	2,697	1,671	5,810	2,649	20,833
2035	2,871	19,605	7,854	3,734	2,445	2,903	1,708	5,882	2,901	23,828
2040	3,740	26,439	12,367	4,467	2,668	3,147	1,788	6,039	3,201	27,229
2045	4,794	34,799	18,847	5,156	2,898	3,381	1,912	6,297	3,496	30,956
2050	6,074	44,453	27,803	5,870	3,148	3,603	2,061	6,673	3,782	35,165

出所：Dreaming with BRICs: The Path to 2050/Goldman Sachs

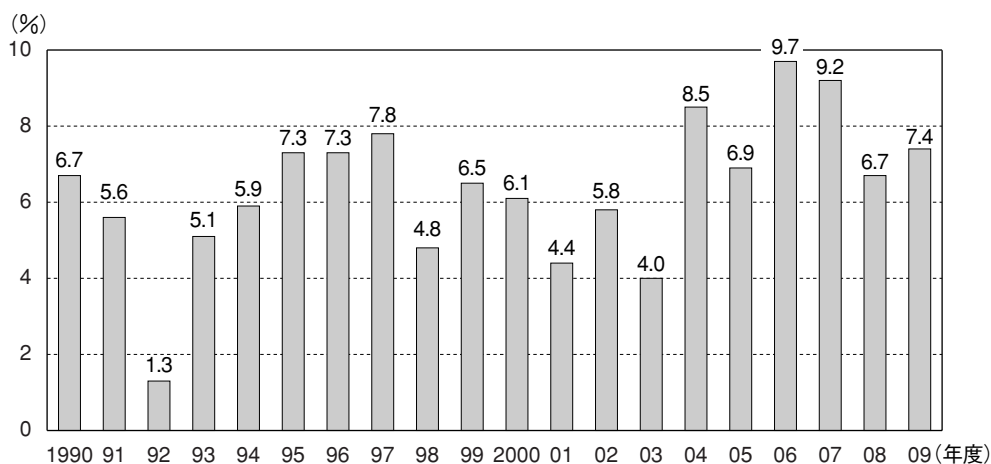
る可能性が高い。

たとえば2003年10月にゴールドマン・サックスが投資家向けに作成したレポートでは、インドと中国の成長率は2015～20年に逆転すると予測されている。(表1)。ゴールドマンによれば、中国の成長率は人口増加の鈍化に伴って、2050年には2.9%まで低下するが、インドは5～6%の成長率を今後も維持するという。GDPの総額では、2050年には中国が44.5兆ドルと世界ナンバーワン、アメリカが35.2兆ドルでナンバーツー、インドは27.8兆ドルでナンバースリーに上昇するとされている(表2)。もちろん、この予測がそのまま実現する保証はないが、インド経済が急上昇することは確かなようだ。実はインドの2000年以降の

現実の成長率はゴールドマンの予測をかなり上回っており、実際2009年度のGDPは約1.25兆ドルと、すでに予測値を上回っている。もし、この傾向が続くとすれば、2050年のインドのGDPは27.8兆ドルをかなり上回ることになるだろう。インドの人口構成はきわめて若く、全人口の54%が25歳以下である。このエネルギーが爆発すれば、インド経済の未来は、中国等に比してきわめて明るいものといえるのだろう。

最近発表された2009年度の実質GDPは7.4% (図1)。2008年から2009年にかけてはアメリカ発の世界同時不況の影響で成長率は2008年度で6.7%まで落ち込んだが、2009年度には中国とともに先進国に先駆けて景気回復の局面に入ってきている。

図1 インド実質経済成長率(1993/94年価格)



出所: CEIC Database

表3 世界主要各国の実質GDP推移

(単位: 百万ドル、1900年基準)

国名	1500年	1600年	1700年	1820年	1870年	1913年
イタリア	11,550	14,410	14,630	22,535	41,814	95,487
フランス	10,912	15,559	21,180	38,434	72,100	144,489
イギリス	2,815	6,007	10,709	36,232	100,179	224,618
スペイン	4,744	7,416	7,893	12,975	22,295	45,686
アメリカ	800	600	527	12,548	98,374	517,383
中国	61,800	96,000	82,800	228,600	189,740	241,344
インド	60,500	74,250	90,750	111,417	134,882	204,241
日本	7,700	9,620	15,390	20,739	25,393	71,653
西欧合計	44,345	65,955	83,395	163,722	370,223	906,374
アジア合計 (日本を除く)	153,601	206,975	214,117	390,503	396,795	592,584

出所: アンガス・マディソン著、金森久雄監訳、『経済統計で見る世界経済2000年史』、柏書房、2004年

3. 有望な投融資先

中国とインドが高成長を続け、世界経済の表舞台に踊り出てきているのだが、長い歴史の展開をみれば、これは決して不思議なことではない。4000年以上昔から、ほとんどの時期、中国とインドは世界のナンバーワンとナンバーツーの経済大国であったのである。しかも、かなりの時期、中国とインドの経済力は拮抗しており、1700年にはインドの実質GDPが中国のそれを上回っている（表3）。西欧の合計のGDPが中国とインドの合計を上回ったのは1870年以降。つまり、欧米列強によるインド、中国等の植民地化が大きく進んだためである。ちなみにヴィクトリア女王がインド帝国の皇帝に就任したのが、つまりイギリスによるインドの完全な植民地化は1877年。また、香港島のイ

ギリスへの割譲はそれに先だつこと35年の1842年、^{カオルン}九龍半島の割譲は1860年である。

第2次世界大戦を契機にアジアの植民地は次々に独立し、世界経済は再び、歴史の通常のパターン、つまり、アジア中心の経済に戻ってきたというわけなのである。A・G・フランクのいう『リオリエント現象』である^注。

そんな中でわれわれが注目しなくてはならないのは、特に中国とインドである。そして、中長期的にみて最も成長率の高いと思われるのがインド。投融資先として、もっともっとインドが注目されてしかるべきだろう。

注：A・G・フランク著、山下範久訳、『リオリエント・アジア時代のグローバルエコノミー』、藤原書店、2000年。

(財) インド経済研究所

<http://www.iies-japan.com/>

(財)インド経済研究所は2006年に早稲田大学インド経済研究所として開設、2010年4月に現在の形に移行。榊原英資が理事長を務める。インド準備銀行（中央銀行）、ICICI銀行からインド人研究員が派遣され専任のスタッフとして研究している。また、日印双方の有力財界人・有識者をアドバイザーメンバーに迎えており、日本側では行天豊雄（財）国際通貨研究所理事長、小島順彦三菱商事会長、三村明夫新日鉄会長など、インド側からはA. ガングリー・インド国会議員、D. パレックHDFC会長、P. カドレ・タタキャピタル社長、N. バグールICICI銀行前会長等が参加。近藤正規ICU上級准教授、広瀬崇子専修大学教授等のインドの政治経済分析の第一人者も参加。大規模なシンポジウムの開催、会員限定でレポート（週報・月報）頒布やセミナーへの参加のほか、インド進出に関する相談やコンサルティングを行っている。

インドのビジネスカルチャー理解のための研修プログラム（ホームページをご覧ください）

研究所では、インド最大の民間銀行ICICI銀行、インドを代表するIT企業ウィプロ社と共同して、政治・経済・文化にわたるインドの全体像をつかみ、インドビジネスのチャンスと可能性を開く研修プログラムを提供します。

インド研修はこのようなビジネスマンに最適です

- ◆インドへの進出を考えている企業の方
- ◆インドに赴任する予定がある方
- ◆とにかくインドを見ておこうという企業の方

業種を問わず、多様な進出フェーズに対応

- 応募条件：要英語力・ビジネス経験10年程度
- 実施時期：2010年11月（予定）
- 募集人数：10人～25人
- お問い合わせ先：03-3568-2970

コースの内容

国内研修（通い2日間）

☆都内にて日本人講師によるゼミ

- インドの政治・経済・文化について解説
- インド人とのコミュニケーション方法論

インド現地研修（10日間）

※宿泊予定：Savera Hotel

- ★チェンナイで、IFMR講師、インド人実業家による英語でのゼミ（ディスカッション形式、ケーススタディ方式で行う）
 - インドのBusiness Culture（社会構造、税制、労働制度、州際業務等）についての講義
 - インドの産業、企業群、その課題と展望（マーケティング戦略、ブランド戦略、現地人材の活用）
 - IFMRの教授陣、大学院生、インド企業社員も参加のセッション
- ★現地企業の視察と意見交換（IFMRがコーディネート）
 - インドを代表するIT企業ウィプロ社（バンガロールに日帰り視察）
 - 中国、韓国との合併企業
 - 将来有望な未合併の現地企業

現地教育施設：IFMR（The Institute for Financial Management and Research）（<http://www.ifmr.ac.in>）
1970年設立のインド最大の民間銀行ICICIを母体とするインド有数のビジネススクール